

海軍

九死に一生

私の従軍記

香川県 橋本 正行

私は昭和十六（一九四一）年五月一日、十五歳と十一月で、志願兵として佐世保海兵団に入団、終戦により昭和二十年九月十五日復員、四年五月海軍生活をしました。その間の戦闘参加における忘れることのできない事柄を綴ってみました。

最初にお断り致しておきたいのは、何分まだまだ子供で、下級の兵のこと故、作戦名の内容、艦名、地名に加えて数字等は上級士官の記録や、先輩から聞いたこと等を思い合わせて書きましたの

で、もし間違っておりますたら何卒御容赦下さい。

「骨が邪魔して痩せられん」（骸骨人間）この言葉は私にとって、現実に見聞きし体験して、終生忘れることのできない言葉です。

ガダルカナル島をはじめ、南方最前線の孤島に取り残された将兵を救出した時の彼らの姿、満足な軍服姿はほとんどおらず、痩せ衰えている。このような気力、体力共に限界の彼らに接して、可哀想に思い、自分達の夜食用の「ニギリメシ」を渡すと、「海軍さん、これ米のニギリメシですな」と喜んで旨そうに食べる。ところが食べ終わると同時にひどい下痢を起こして、ビククリ仰天、その後の大慌てで艦内掃除が大変であった。

敗戦の悲惨さ、戦争の無情さをつくづく感じました。ちなみに、ガ島で収容した兵士に聞くと、昭和十八年の正月に、米一合の特配があり、以後食物の支給一切なしという。この間、二カ月余り、生きるために草木、動物など、口に入る物は何でも食べた。時には、命がけで盗人となり、米軍の食物を夜コッソリと頂きに行き、多数の戦友が死んだとのことである。

その点、私達海軍は軍艦生活で欠食知らずの元氣旺盛で戦える幸せを感じたものである。

四年半の海軍生活の足跡

昭和十六年五月一日から八月十五日まで、佐世保海兵団において新兵教育を受け、同日三等水兵となる。

軍艦「千歳（水上機母艦）」乗組みを命ぜられ張り切る。八月十八日、大分県佐伯で乗艦以後、「月火水木金」の早朝から夜間まで連日の猛訓練に加え、港での夜は毎晩のように「整列！」がか

かり、ビンタとお説教は、軽い、軽い、ほとんど軍人精神注入棒で尻をかかなりの力を入れて七、八回、尻の痛さで仰向けに寝られず、何の因果で海軍に入ったと、同年兵と並んで上級者の靴を磨きながらヒソヒソと泣き言を……。

でも最下級兵の私達には「戦争は有り難くないものだ」と思えた、嘘のような話がある。それは開戦と共に激しく厳しかった訓練が少なくなり、艦長の命で、夜の整列もほとんどなくなり、加えて、食事の内容が良くなり、貧乏百姓育ちの私にはもったいないようなご馳走で、おまけに戦時給与の酒、ビールも時々あつて、言うことなし。その上戦争と言いながら敵の姿を見たことも、銃声も聞かず、我が世の春を感じていた。けれども、それも僅か二十五日で終わり、この世の地獄を見る生活となるのである。

初めて知る戦争の恐ろしさ

昭和十七年一月四日、フィリピンのマニラ湾内

には数多くの日本の軍艦がのんびり正月気分を味わっていたところへ、突然ボーイング17の大編隊の襲来で大慌て

「全員戦闘配置につけ！」で、それぞれ持ち場へ、私の所属する班は、今でいうコンピュータームのような所で、私のとき新兵は、使い所なし。

私の戦闘配置は戦橋の上で応急用の連絡係（口答での）である。ほとんど必要の無い場所で、一人で青空を仰ぎ、シヨンボリとしている。しかし、戦闘状況は一番良く見える場所であった。生まれて初めての实战に遭遇である。

戦闘が始まると、在泊中の軍艦が発射する大砲や機関銃の音に加えて、敵機から投下される爆弾の水柱に、びっくり仰天、特に目の下の高角砲の発射音と飛び出す弾丸の風圧を感じ、全身ガクガク、早く逃げんと死んでしまおうと思い、どこか身を隠す所は無いかと思った。

しかし、ここで死んだら「名誉の戦死、離れた場所では敵前逃亡で、家族に迷惑が及ぶ」と思い、

震えながら、我慢して戦争とは恐ろしく、辛いものだと初めて痛感したのである。

昭和十七年五月から十月まで、横須賀海軍砲術学校で、中口径の大砲術の教育を受け、十一月に長崎市で駆逐艦「文月」に乗艦、二番砲の一番砲手として勤務することになった。

修理を終えた「文月」は門司から、台湾の高雄まで二回、船団護衛の航海でした。この時、東シナ海の波の荒さに驚きました。左右のスクリューが交互にカラカラと空回りし、前後の艦は見え隠れし、食事は紐で吊るした一品ずつ左右、上下に揺れながらで、おまけに船酔いで食欲無く、苦しい航海を経験しました。

昭和十八年一月から、昭和十九年一月四日、南洋群島方面で負傷して入院するまで、苦しく厳しい補給、揚陸と撤収作戦に従事しました。

日ごとに激しくなる対空戦の連続の一カ年となる。まず一番に特筆すべきは、ガダルカナルの兵員救出作戦である。

ガ島に三万三千六百人の兵力が投入されたが、米軍は五万余の兵に加え、豊富な武器弾薬は勿論、際限ない航空機と艦艇による連日、連夜の猛攻で、さすがの日本軍も二万余の戦傷病死を数え、補給の続かぬ最前線の残存一万三千人は、そのほとんどがやつと生きている骸骨人間になり、一刻を争う救出が求められていたのであった。

ガ島の撤収作戦は二月一日から八日の間、駆逐艦二〇隻で、三回実施され、奇跡の全員救出に成功したのである。

第一次作戦は、二月一日、出撃、エスペランス島、十五隻、カミンボ行き六隻で、ショートランド島を出る。途中、B 24 外、約三十機の攻撃を受け「巻波」至近弾で航行不能となり、「文月」が曳航して引き返す。第二次作戦は、二月四日出撃、エスペランス隊一三隻、カミンボ隊七隻で向かう。「文月」カミンボ隊の警戒隊として参加、この日も戦闘機、艦爆機合わせて六十四機の襲撃を受け、対空戦、零戦十七機に守られながら戦う。舞風、

至近弾で損傷、ノロノロながら自力で引き返す。

第三次、二月七日、カミンボ隊八隻、「文月」は収容隊となり参加、この日も、午前三時頃、待ち構えていた艦爆隊攻撃を受け「磯風」の一番砲と船尾に、それぞれ直撃弾を受け、火災発生するも自力で引き返す。

この三回の収容作戦で、海軍八百三十二人、陸軍一万二千余人、合計一万三千三十人の撤退が完了したのである。

休む間もなく輸送作戦と、対空戦闘は続く。三月三十日、フィンシュハーフェン輸送作戦中、夜明け前、敵機の投下した爆弾が海中爆発、それに乗り上げ機関室に浸水と、キール線折れで大変なこととなる。有るだけのポンプで海水の汲み出し作業で、皆ヘトヘトで休むことはできないので懸命に続ける。前方に重巡

「青葉」が直撃弾で火災発生で大変な様子であった。

トラック島で応急修理をして、五月、佐世保に帰り修理、八月、修理終わり、「五州丸」を護衛しながら、トラック島を経て、九月四日、ラバウルに入港したが、休む間もなく前線へ輸送作戦と、一層激しさを増した。敵機との対空戦に明け暮れる毎日である。

日
その中で数少ない海戦の模様を書けば、十月二

日
「セ号」作戦では、夜半に揚陸を終えた後、敵巡洋艦及び、駆逐艦と砲戦、魚雷戦あるが戦果はない。

十月六日「ベラ」作戦。夜中にラバウル出発。翌日、午後、対空戦闘、夜七時過ぎから、夜中の十一時半過ぎまで激しい対艦戦争。暗闇の事故、我々は戦況知らず、発表の戦果は「重巡一隻大破沈没、我が方は駆逐艦「夕霧」沈没とのこと。

十一月二日、二五〇機の敵機と、港外で対空戦、

「文月」の被弾二〇〇発以上。戦死十人、重傷者十五人、ラバウル第八海軍病院に入院、加療後、戦死者、三日に土葬、冥福を祈る。

流行歌手「上原 敏」、救助、歌を聞く。

十一月二十八日、イボキ輸送作戦で収容した陸軍兵の中に、当時の売れっ子の歌手「上原敏」がおり、砲台甲板で熱唱、オーケストラの伴奏なく、素声の歌、体調悪く、顔色も悪く元気なさそう。しかし、さすがプロの一流歌手、感動を与える。味のある歌であった。その後死去されたと聞く。

明けて、昭和十九年一月一日、遙拝式が終わると間もなく、B 24 二〇機、戦闘機との戦、敵は「お年玉」に小型爆弾を多数、東飛行場に投下、一機墜落する。私は負傷するが死線を越える。

一月四日早朝、トラック島よりカビエンに輸送艦隊来る。その警護と対潜警戒の命あり。皁月と共に任務に就く。午前六時前、「敵機動艦隊接近中」との報あり。

揚陸六時終了、直ちに輸送艦隊は全速力でトラ

ツク島へ。我々は便乗の兵士を乗せ、七時頃出発、その時、後方上空には、空母二隻の艦載機の大部分が迫って来るとの見張員の声に振り向けば、雀の大群かと思えた百機位の艦載機に驚く。しかし、旧型駆逐艦二隻であれ程の大群が来る筈があるまい。きつと輸送艦隊を追い掛けてくるだろう。その内救助に行けと命令が出るぞと、呑気な話をしながら、上空を見ると敵機は高度を下げて、いよいよ向かって来るではないか。

その時思った、駆逐艦一隻で、五〇機の艦載機と戦えば、勝ち目はあるまい。俺の命も今日で終わりかと覚悟を決めると、総身の毛は逆立ち全身がカチカチ、目は血走り、皆もすごい形相で敵機を睨みつけている。

人間、いよいよ追い詰められると、やけくそと言うか、開き直って、どうせやられるなら、俺も命の限り、やり返してやるぞ、と敵愾心が旺盛となり、恐ろしさも薄れるものだと思った。

戦闘が開始後、その時間は判らぬが、艦長の上

手な操艦で、投下爆弾を五く六発うまく交わして、左艦尾で水柱を上げ魚雷も対岸で二く三発爆発するのを見た。我が砲も発射の数は定かで無いが、三番砲手の川津上水が、次の弾をと振り向くと同時に倒れた。大声で

「川津！」と呼んでみたが、彼は即死であった。最期の弾を発射直後、内光が目に飛び込んだような気がすると共に、意識不明、ただ誰かに揺すられ、目を開くと、砲尾に倒れており、どこをやられたのか傷も分からず、痛さも全く覚えず、ただただ息が苦しく。

小さく吸うのみで、俺の人生も終わりかと諦めると、思い起こすのは故郷のことで、自分は三男坊で独身、死んで泣くのは母さん位で、まあええわいなと、思い横を見ると（砲身長で）射手の吉岡上曹をはじめ全員負傷、応急の止血に懸命、俺も血止めをと思いながら意識を失う。

誰かに呼ばれ、揺すられて朦朧としながら意識がもどり「オイ、シツカリセー」と言われて生き

たんだなあと思った。

時は午後一時半過ぎ、その間、六時間余り経過しており、この戦闘で、艦橋を除き上甲板以上にある者はほとんどやられ、死傷三十数人、砲術の戦力零に近い有様。

戦果は十一機撃墜、「文月」「皐月」共に沈没せずも、「皐月」の飯野艦長が左足を切断、入院後死去したとのこと。それに対し、司令長官草鹿中将閣下より、抜群の功として賞されたとのこと。

入港と共に、ラバウルの第八海軍病院に入院。傷病名(顔面)(二個)同前胸部(五個)盲貫機関銃弾の片創、左第三肋骨骨折、肺血胸と書いてあったが、後日、レントゲン検査右上腕及両足各一個あり、全部九個の弾片を受けた事になるが、一個摘出、現在八個保有、他人が持たない私の財産とっております。

一月中旬、病院船「氷川丸」で呉海軍病院に帰る。三月高松日赤病院に転院治療を受け、九月に

別府亀川の海軍病院転院、十一月三十日退院、佐世保海兵団に帰団、昭和二十年一月、相之浦海兵団に転勤、終戦復員まで、新兵教育の教員として勤務する。

以上は、私の記憶による戦績であるが、正式の履歴書によれば、若干の記憶違い等もあるので、昭和十八年十二月一日以降の経歴を次に記してみる。

昭和十八年十二月一日、海軍水兵長を命ず。

同十九年一月四日〇七・二六頃「ニューアイランド島」「ステフェン」水道に來襲せる敵中型機大編隊を迎撃、対空戦闘中、敵機銃弾に依り(左顔面、同前胸部盲貫機銃弾片創、同第三肋骨単純骨折皮下気肺肺血胸)戦傷、同日夕食後、第八海軍病院に入院を命じ送院。

一月四日 第八海軍病院に入院中のまま佐世保第一海兵団に送籍。普通善行章

昭和十九年

一月三十一日 特設病院船「氷川丸」に転院
二月二十六日 呉海軍病院高松日赤病院に転院

八月二十六日 呉海軍病院に転院
十一月三十日 入院中のところ、全治退院帰国

昭和二十年

一月 十日 相浦海兵団付を命ず
五月 一日 任海軍二等兵曹
九月 十五日 予備役編入

まさに、昭和十六年五月一日、佐世保海兵団に入団、海軍四等水兵を命ぜられ、四年四カ月余の海軍勤務であり、比島・蘭印・ニューギニア方面の戦闘に参加、九死に一生を得た私の人生でありました。

また、私の主な戦歴は、次のごとくです。

昭和十六年十二月八日～昭和十七年五月一日
フィリピン、蘭印、ニューギニア方面作戦に従事

昭和十七年一月 太平洋方面作戦
昭和十八年 南洋群島方面作戦

二月 第八艦隊第三水雷戦隊
五月 横須賀発、太平洋方面戦地、南洋方面

九月一日 ニューアイルランド島
八月二十日 南洋方面

昭和十九年

一月四日 ニューアイルランド島ステッフエン水道に来襲せる敵中型機大編隊を邀撃中、銃弾により第三肋骨単純骨折、皮下気肺血胸、戦傷。
第八海軍病院入院中のみま、佐世保海軍病院に送院。

一月三十一日 特設病院船「氷川丸」に転院
二月二十六日 呉海軍病院高松日赤病院に転院

昭和二十年

院

一月十日 相浦海兵団付を命ず

四月一日 相浦警備隊付を命ず

五月一日 任海軍二等兵曹

五月十六日 教員を命ず

九月一日 海軍一等兵曹

九月十五日 予備役編入

三月十二日 司令・金岡中佐着任

三月十五日 陸軍傷病兵退艦

三月二十三日 スルミ発、スルミより設営隊員

三月二十八日 二八七人輸送

三月二十八日 ○五一五・出港。時差修正

三月二十八日 フィンシュ輸送作戦。ココポに

て陸兵二二三人並びに物資搭載

フィンシュ着、揚陸成功

陸兵一四〇人輸送。

四月一日 「海福丸」横付け陸兵、輸送物

搭載

一七一五 敵機接触により反転、

帰投

八月二十六日 ○六三〇 サイパン着、港泊

八月二十七日 サイパン発、「五州丸」護衛

八月二十一日 ○九三〇 出撃、駆逐艦「天霧」

と共に「五州丸」「宮崎丸」「リ

オン丸」護衛

九月四日 「鳴戸」に横付け重油補給

昭和十八年

【駆逐艦「文月」奮戦記】

三月三日 一〇〇〇 ラバウルに向かう

三月六日 スルミ輸送、「水無月」と同行

三月九日 レカタ輸送作戦

三月十日 ショートランド発、着

三月十一日 レカタ着、揚陸成功。レカタ発、

ショートランド着、発。レカタ

より防空隊員・設営隊員四〇人、

傷病兵五七人（内三人死亡）

九月八日	○五〇〇 出港、時差修正	十月十八日	P 38、B 25、B 26、一〇〇機 来襲、港外に出撃、撃退
九月九日	(伊国単独無条件降伏)	十月二十一日	ダンピール輸送作戦
九月二十一日	「皐月」と共にグイン輸送作戦	十月二十三日	○九二五 P 38 一〇〇機来襲、港外に出撃、撃退
九月二十六日	「鳴戸」より重油補給	十月二十四日	イホキ輸送作戦、B 25 二六機、 P 38 一〇〇機来襲
九月二十八日	「セ」号作戦、一〇五〇 コロ ンバンガラ着、魚雷艇撃壊、一 七二	十月二十五日	B 24、P 38、来襲
九月二十九日	セーブイン北方で対空戦闘	十月二十六日	司令・駆逐艦「文月」に変更
九月三十日	対空戦闘	十月二十七日	敵、モノ島に上陸開始
十月二日	「国洋丸」横付け、重油補給 二二三〇 敵巡洋艦及び駆逐艦 と砲戦、魚雷戦、戦果、被害な し	十月二十九日	ガロベ輸送作戦
十月六日	「ベラ」作戦、対空、対艦戦闘 戦果 巡洋艦 一撃沈 駆逐艦 三撃沈 巡洋艦 一大破、沈没	十一月一日	ブーゲンビル逆上陸、 ブーゲンビル沖夜戦
十月八日	ブカ輸送作戦。対空戦闘、ブカ北 方で至近弾六食らう	十一月二日	P 38、B 25、二五〇機大空襲、 超低空爆撃を受く 本艦被弾二〇〇発以上 戦死一〇、重軽傷一五、撃墜一 〇機
		十一月四日	タロキナ逆上陸作戦(延期)

十一月五日	タロキナ逆上陸作戦（延期） ○九一五 B 25、P 38、B 24、 来襲、対空戦闘	十二月二十五日	ガロベ輸送作戦
		十二月二十八日	敵戦闘機大編隊来襲
		昭和十九年	
十一月六日	タロキナ逆上陸作戦	一月一日	空襲、小型爆弾多数投下
十一月七日	B 24、P 38、大編隊来襲	一月二日	F型機等約四〇機来襲、空中戦
十一月十一日	敵艦一七〇発見。敵艦爆戦闘機、 大型機約二〇〇来襲	一月三日	F型機等計五〇機来襲、空中戦
	港外出撃スクール中で一機撃墜、 二機白雲（ブーゲンビル沖航空 戦）	一月四日	敵機九〇機来襲、一〇機撃墜
		一月〇日	撃退、戦死傷三一人
		一月二十二日	「臯月」艦長戦傷死
十一月二十五日	ダンピール岬輸送作戦	一月二十四日	ガブプ輸送作戦
十一月二十七日	イボキ輸送作戦	一月二十五日	ガブプ輸送作戦
十一月二十九日	イボキ輸送作戦	一月二十六日	敵接触機と対空戦闘
十二月一日	イボキ輸送作戦	一月二十七日	ガブプ輸送作戦
十二月四日	ステフェン水道南にて水偵と 協力、対潜水艦爆雷攻撃を行 うも効果不明。	一月三十日	一六三五 艦爆戦闘機約一〇〇 機来襲
十二月二十日	敵機、来襲。西飛行場爆撃	二月一日	B 25 二機来襲、対空戦闘
十二月二十二日	ガロベ輸送作戦	二月二日～十六日	船団爆撃を受けるも被害なし
			航海中に敵機の爆撃により被

二月十八日

弾

「総員退去」「文月」沈没

三号敷設艇にて警備隊上陸す

戦死九人、重軽傷者三四人

戦果、砲火により三機撃墜

上海陸戦隊員

福岡県 篠崎数馬

私は、大正十一（一九二二）年九月二日、福岡

県糟屋郡新宮町大字湊で生まれました。

家業は農業です。水田一町三反（裏耕作に玉葱、

馬鈴薯、麦）畑七反（サツマイモ）等です。農閑

期には日雇い労働者（土方）などしていました。

入隊当時の家族は、次のように十人家族でした。

- 祖母 健在
- 父 健在 農業 町内会長
- 母 健在 農業
- 長男（本人） 健在 農業
- 次男 健在 学生
- 三男 健在 学生
- 四男 健在 学生
- 妹三人 健在